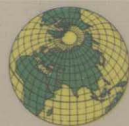


# ぼくは報道する

民族のすがた・声



本多勝一

ちくま少年図書館11

社会の本





# ぼくは報道する

民族のすがた・声

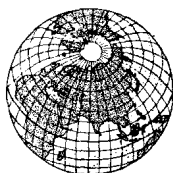
本多勝一

著者略歴

1933年，長野県に生まれる。京都大学農林生物学科を経て，朝日新聞に入社。東京本社編集委員。著書はあとがきであげたほかに『北海道探検記』『山を考える』『きたぐにの動物たち』などがある。

筑摩書房／1971年初版

244pp／18.8cm／四六判



1971年3月25日 第1刷発行 650 円

著 者 © 本 <sup>ほん</sup> <sup>だ</sup> <sup>かつ</sup> <sup>いち</sup>  
多 勝 一

発 行 者 竹 之 内 静 雄

発 行 所 株式 <sup>ちく</sup> <sup>ま</sup> <sup>しよ</sup> <sup>ほう</sup>  
会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2-8

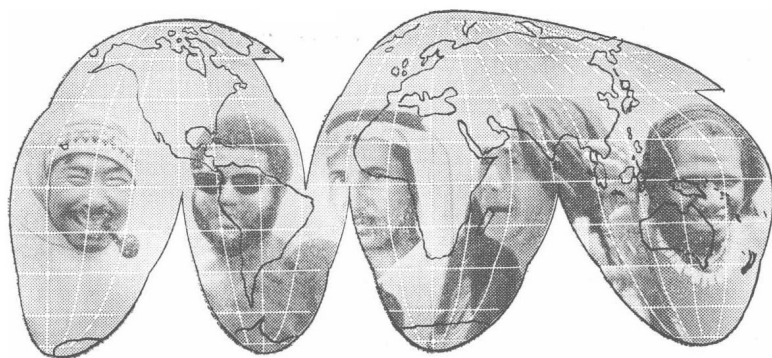
電 話 東 京 (291) 7651 (代表)

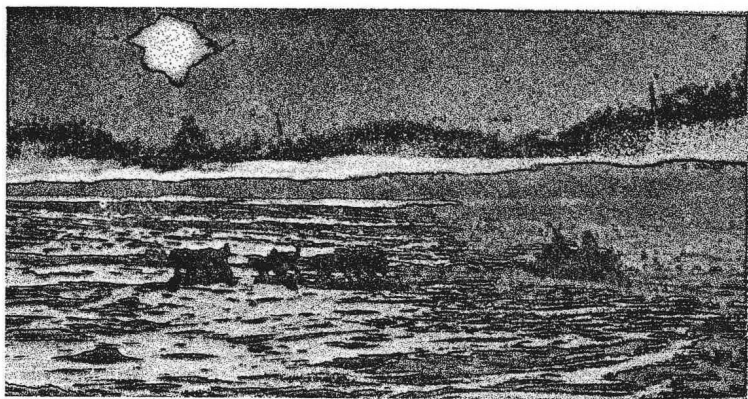
郵便番号101-91／振替・東京4123

厚德社印刷・和田製本

(分類) 8095 (製品) 04011 (出版社) 4604

ぼくは報道する——民族のすがた・声——





もくじ

第一部 エスキモー

——北極圏の氷雪に生きる狩猟民——

1 極北を生きぬく知恵……………9

白夜の出発 カヤグナ家の同居人 日本  
は北極より寒い 「食事」とは何か 世  
界最高の防寒服 主婦の仕事

2 犬を甘やかすな……………27

悲鳴の大合唱 ヒューマニズムを犬に使っ  
てみると

3 トナカイ狩り……………34



4 エスキモーの心……………42

母と子 美女の定義 娘ごころ

## 第二部 山地パプア

——ニューギニア高地の石器時代農耕民——

1 ニューギニア中央高地へ……………55

2 モニ族の純朴じゅんぽくで家庭的な生活……………61

ヤゲンブラ家 発火法 容器のない生活

指なしばあさんは語る

3 生きている石器時代……………77

石器時代の最後 石斧の切れ味 石器時

代も案外不便なものではない

4 ダニ族の団体生活と奇妙な男たち……………87

「男の家」と「女の家」 団体生活 コー

ラスとヨーデル



### 第三部 ベドウィン

——アラビアの砂漠に生きる遊牧民——

1 親切でつつしみ深いベドウィンたち……………103

遠慮ごっこ 招待の榮譽

2 ラクダに人間が飼育<sup>しいく</sup>されるような生活……………110

遊べない遊牧 ラクダとともに 羊飼いのサリム

3 「親切」と「つつしみ深さ」に潜<sup>ひそ</sup>むもの……………120

テイク・アンド・テイク 親切の正体

砂漠の掟 おぼろにけふる月の夜

### 第四部 ベトナム人

——独立戦争に明け暮れる

東南アジアの民族——

1 戦場の村……………135



弾雨下のイネ刈り 戦闘 故郷への手紙

焦土戦術 耳の記念品 廃墟の老婆

2 解放戦線と解放区……………156

砲艦の攻撃 深夜のメコン横断 解放区

の生活 かくしとりで ヘリコプターの

恐怖 戦う姿勢

3 北爆と戦う生活……………182

タコツボの国土 ジェット機对小銃 分

散の原理 無差別爆撃 さまざまな戦い

子供たちの歌声 団結の歌

## 第五部 アメリカの黒人

——無法と暴力の国のドレイ——

1 ドレイ船時代から現代へ……………207

アメリカは「自由」と「民主主義」の国か

人間の貨物





2 ある黒人家庭

無視される側

武装家族

アメリカ的貧

困

212

3 無法と暴力の国に生きる

.....222

白人の食堂

黒人への定石

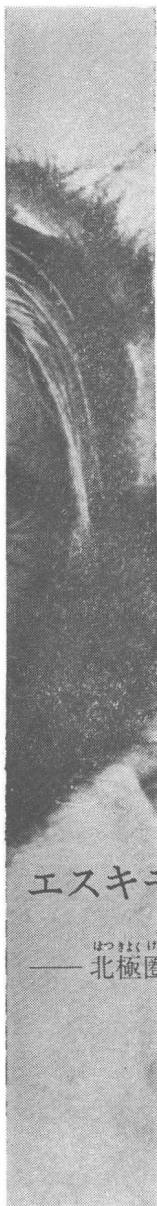
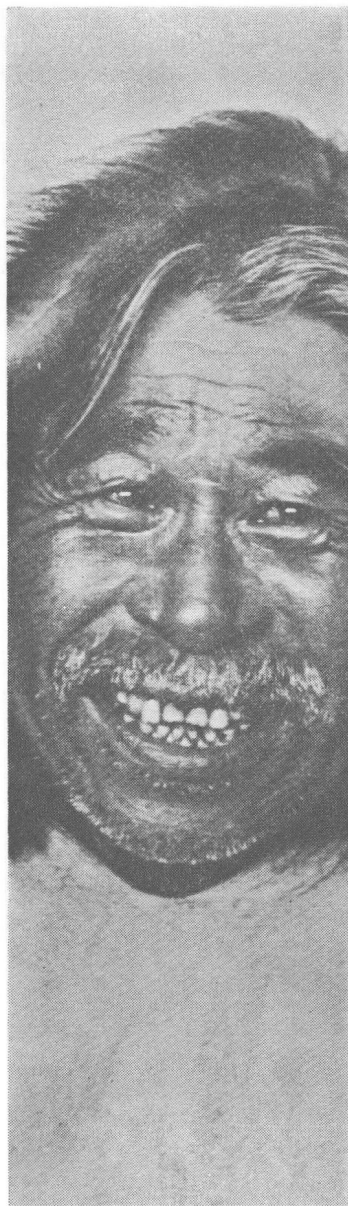
白昼のテロ

霧の夜道

あとがき

237

写真 藤木高嶺  
ふじぎ たかね  
(・印のついたもの)



エスキモー

——<sup>はつぎょくけん</sup>北極圏の氷雪に生きる<sup>しゅりやうじん</sup>狩猟民——

# カナダの北部



# 1 極北を生きぬく知恵

## 白夜の出発

ふたりのエスキモーが、犬ゾリで私たちを送ってくれたことになった。

ふたりは、はじめて私たちに会ったとき、はにかみがちな笑いを顔いっぱい  
に広げて近づいた。そして立ちどまったまま、いつまでも、ただ単に笑っている。エスキ  
モーのあいさつは、できるだけうれしそうに笑いつづけることだときいていた。私たちも、  
できるだけうれしそうに笑い返す。いや、こんなに愛想よく笑いかけられては、だれだっ  
て自然に笑いださざるを得なくなってしまう。あんまりいつまでも単に笑い合っているの  
は、氣違いどうしみたいでおかしいから、覺えたばかりのかたことエスキモー語で話し  
ける――

「キナウイ（何て名だね）」

「イケトック」「イギ」――答えるなり、ふたりは顔を見合わせて「イヒヒヒ」と笑った。

つづけて私になにか言うたびに、ふたりとも「イヒヒヒ」と笑う。こんなふうに笑うのは、  
エスキモー語の「はい」が「イー」または「ヒー」だから、イーと答えたその口で笑いだ  
すせいかもしれない。「日本から来た」というと「イー、イヒヒヒ」。「飛行機で来た」「イ

◀ 午前2時　すでに高く上った深夜の太陽をあびて私たちは旅をする(・)

「、イヒヒヒ」。「エスキモーとよく似てるだろう」「イー、イッヒヒヒヒートツ」

出発は夕方の六時だという。もっと朝寝しておけばよかった。目的地は、約一五〇キロ南のウスアクジュ部落。何日かかるかは、雪のしまりぐあいと、犬ゾリの調子と、お天気しだいだ。あわててはいけない。だが、出発とは「出発準備開始」のことなのだ。午後六時になると、ふたりはそれぞれのソリに犬をつなぎ始める。イケトックは一〇匹、イギは一二匹。荷物はたいした量でもない。

炊事用具すいじを入れた木箱。寝具の毛皮。私たちのテントと食糧しょくりょう。セイウチの輪切りにした胴体どうたい……。セイウチは、人間と犬との共通の食糧だ。生なまのまま凍こって、材木こまのようにかたい。ふたりは、出発準備よりも、隣人たちとおしゃべりし、ふざけ、笑いつづけるほうに大半の時間をかけている。

やがて、二台の犬ゾリはなんとなく動きだす。「オワイ、オワイ」と、ふたりは犬たちには声をかけるが、私たちにはなにも言わない。この部落を訪問中の、エスキモー語を自由に話すイギリス人と立ち話をしていた私たちは、彼に「そら出発だ、置いてかれるよ」と言われ、あわててソリにとび乗る。出発らしいふんい気は毛ほどもない。荷の積みこみを手伝っていたイケトックやイギの妻たちは、とくに家へ引っこんだ。ふざけ合っていた隣人たちもいなくなった。手を振って見送るのは、エスキモーではなくて、ひとりのイギリス人だけ。その影が、地平線に近づいた太陽の逆光の中で、小さな黒点となって



消える。

一九六三年五月一八日午後八時すぎ。藤木高嶺<sup>たかね</sup>カメラマンと私はこうして、ホールビーチのエスキモー部落をあとにした。カナダ東部の北極圏<sup>ほっきょくけん</sup>、メルヴィル半島の東海岸。北緯六八度五〇分、西経八二度一〇分。快晴無風。気温<sup>れいど</sup>零下<sup>げふか</sup>一八・五度。北極圏は、すでに夜のないう季節にはいつている。前日からまる一昼夜つづいた吹雪<sup>ふゆき</sup>は、夕方からすっぱりやんだ。限りなくひろがる大雪原の地平線上、北西の方角に、太陽が冷たく輝く。犬と、ソリと、人間の影が、雪の上に長くのびて走る。私を乗せているイクトックが、太陽を指さして言った——「シクリネルック」。私たちが奇怪な発音のエスキモー語で話しかけるので、彼は単語を教えようとしているのだ。復唱してみせると、また「イー、イヒヒヒ」。そして、つぎつぎと指さしながら「アプット(雪)」。「キンメルック(犬)」

……。

陸地は海面すれすれの低い標高のまま西の地平線に消え、海は完全に凍結したまま東の水平線に消える。そのすべては雪におおわれ、陸も海も区別がつかない。犬ゾリは、主として海の上を海岸ぞいに南下する。真空のように澄みきった大気。あまりにも白い雪と、濃い影とのコントラスト。黙々とソリを引くエスキモー犬たち。ソリの下で、かすかな金属性の音をたててきしむ雪。ときどき思いだしたように、イケトックが指導犬の名をよぶ——「オマンゴアリ」。すると、ひときわりっぱな体格をした先頭の犬が、走りながらかすかに横をむいて反応を示す。

地平線にむかつて斜めに近づいていった太陽が、午後一時半、雪をあわいアカネ色に染めながら沈む。が、夕焼けはそのまま朝焼けに移る。午前一時半には、太陽はふたたび北東寄りの地平線に顔を出した。わずか二時間の日没。その間も、新聞がらくに読めるほど明るい。はじめて経験する白夜の旅に、私は軽い興奮をおぼえ、眠気も感じない。地平線にシンキロウが現われた。前方の地平線は、つぎつぎとちぎれとぶ雲のように見え、後方の地平線は、逆光のなかで燃える湖のようだ。

午前四時半。約五〇キロ南下した位置でテントを張る。カルマンとよばれる海岸の沖約二キロの海氷上。太陽の輝きがようやく増しはじめるころ、私たちは寝袋にもぐる。



◀ うすぐらい家のなか(\*)

## カヤグナ家の同居人

出発してからまる四日すぎた深夜。小さな岬状に突き出た海岸に、雪にうもれたウスアクジュ部落が見えはじめた。ウスアクジュとは、「小さなオチンチン」の意味である。部落とはまだ一キロ余りも離れているのに、バラバラ子どもたちがとびだしてきた。ソリに向かって、いっせいに走ってくる。ついで、たくさん

のサイレンみたいな音が、いちどに鳴りだした。部落のソリ犬たちが、オオカミのような遠ほえを始めたのだ。

子どもたちは、うれしそうに何かさけびながら、私たちのソリにつぎつぎと飛びのる。十数人が鈴なりだ。午前〇時近いというのに、こんなにおおぜい起きている。犬ゾリは急に重くなったが、犬たちは終着点が間近いと知って、必死で引っ張る。やがてソリは、鈴なりの子どもたちを乗せたまま、部落にすべりこんだ。雪にすっきり埋もれた部落は、どこに家があるのか、よくわからない。

子どもたちがはしやぎまわるなかで、おとながひとりだけ現われた。私たちの数メートル前で立ちどまった男。もうこれ以上は不可能と思われるくらい、満面の笑顔<sup>えがほ</sup>をみせて突っ立っている。こちらにも負けまいと笑い返し、名まえをきくと「カヤグナ」と答



えた。三一歳だという。ほかのおとなたちは、どうしたのだろう。「狩りに出てゐる、すだ」とカヤグナ。奥さんたちは、いるはずだが、ひとりも現われない。どこかの家に住みこませてもらえるだろうか。イケトツクの案内で、部落の家を全部のぞいてみることにする。こんな遅い時間でだいじょうぶか、という、イケトツクはげんな顔をして、「ナマクト。アテイ、アテイ（平気だ。来い来い）」と答える。

部落じゅうの家といつても四軒だけ。全部で六家族だから、二軒は二家族の同居だ。まずカヤグナの家。雪のトンネルをくぐって斜めにおりてゆく。トンネルの途中に雪穴があり、生まれたばかりの子犬たちが、母犬の乳房にむらがっている。ついで、食料置き場。セイウチやトナカイの死体が、かたく凍（こ）まてごろごろしている。食料置き場から、高さ一メートルたらずの板戸をくぐる。とたんに鼻をつく異様なにおい。そこが二家族の全部が住む古キャンパス張りの部屋だ。うす暗い一室に、主婦と子どもたちが七、八人。寝ている者はひとりもない。私たちを見て、赤ん坊が泣きだした。一〇畳あまりの広さの部屋は、入り口寄りの半分が土間、奥の半分が寢床兼居間だ。寢具の毛皮などが散乱している。いったい、この強烈な悪臭（あくしゅう）は何だろう。一〇分とたたないうちに原因がわかる。便器にしている空カンが二、三個床に置いてあるし、片すみには動物の残骸（ざんがい）が重なっている。おとなは手ばなをかみ、タンをはく。赤ん坊はせきをするたびにもどす。土間は、それらが動物のあぶらといっしょにこねまわされて、ヌルヌルしている。主婦の前には、アザラシ